

澤田 泰紳

## 『日本メソヂスト教会史研究』

(日本キリスト教団出版局、2006年)

松木田 博

歴史研究の要は、史料を丹念に読むことであろう。そもそも史料がなければ、歴史は研究しようがない。歴史を記述する場合には、一次史料をどれだけ集められるか、それをどれだけ正確に読むことができるかにかかっている。だから、史料を読む能力だけでなく、史料収集の能力も、歴史家の力量の一つであろう。

そういう意味では、澤田泰紳先生は大変優れた歴史家であり、歴史の書き手だった。先生はとにかく、史料を収集することに時間と労と、そして財とを惜しまれない方だった。できうる限りの史料を集め、それを丁寧に読みながら、記述してゆく。もし疑問点があれば、納得行くまで史料を読まれる。考察は全て、史料に基づいてなされた。当たり前だが、それが歴史研究の基本である。澤田先生は、一切手抜きをなさらずに、納得行くまで史料と取り組まれた。曖昧な部分を残して歴史を書くようなことは、一切なさらなかった。たった一行の文章を書くのに、数日間を費やされることもしばしばであった。だから、澤田先生が書かれた論文は、そのどれをとっても歴史研究の上で非常に価値がある、といえるだろう。

その澤田泰紳先生が、生涯にわたって取り組まれた『日本メソヂスト教会史』が、このほど上梓された。この本は、書き下ろしではなく論文集である。澤田先生が、山梨英和短期大学宗教主任、また教授としてご活躍されていた時に、書かれたものである。一読して分かることは、どの論文も一次史料を

詳しく研究した上で執筆されている、ということだ。

ただ、大変残念なことに、先生ご自身はこの本の出版を見ることなく、天の国に召されてしまわれた。2002年10月18日の事であった。しかしながら、先生のご研究は、一部の研究者の間だけでなく、より広く知られることとなった。主なる神が、日本のメソヂスト系諸教会を愛し、さらなる発展のためにこのように備えてくださったと信じる。

以下に、本書の内容を概観してみる。

## 第一章 「明治期における在日本メソヂスト諸派合同運動の研究」

これは、『山梨英和短期大学紀要』第15号、第16号、第20号に掲載された論文である。当時日本で宣教活動を展開していた、カナダメソヂスト教会(the Methodist Church)日本年会、米国メソヂスト監督教会(the Methodist Episcopal Church)日本年会と南部年会(美以教会)、南メソヂスト監督教会(the Methodist Episcopal Church, South)日本年会(南美以教会)の三派が合同し、日本メソヂスト教会が誕生したいきさつが、細かく記述されている。

## 第二章 「日本メソヂスト教会史—三派合同を中心として—」

これは、同志社大学人文科学研究部編『日本プロテスタント書教派史の研究』(教文館、一九九七年)所蔵の論文である。日本メソヂスト教会の成立史を知る上では貴重な論文である。

## 第三章 「カナダ系日本メソヂスト教会の伝道と教会形成—Circuit Systemを中心として—」

これは、『キリスト教史談会パンフレット』16(1981年)所蔵の論文である。澤田先生は、このCircuit Systemをどのように理解するかについて、大変苦心なさったと言うことを、病床で語ってくださったことがあった。詳細は、本文を参照されたい。一応の解釈がつけられているが、日本におけるこれからの宣教論として発展させるために、さらなる今後の研究が待たれるところである。

## 第四章 「イビーにおける伝道とキリスト教理解」

これは、『山梨英和短期大学紀要』第10号に収録された論文である。イビーは、カナダメソヂスト教会の宣教師であるが、彼については、例えば米国メソヂスト監督教会の宣教師であったハリスほどには知られていないと思うが、いかがであろうか。だが、日本における初期メソヂスト宣教師を知る上では、大変重要な人物の一人であることは、論を待たない。イビーについて、この論文を通して広く知られれば幸いである。

## 第五章 「日本におけるメソヂスト教会の自給について」

これは、『キリスト教社会問題研究』第47号所蔵の論文である。この論文と、続く第六章で、日本におけるメソヂスト教会の自給教会について論じられている。

## 第六章 「明治期の地方農村における教会の自給についてー日本メソヂスト市川教会の場合ー」

これは、『山梨英和短期大学紀要』第一三号所蔵の論文である。一つの教会が自立してゆく過程が、細かく分析されている。地方の農村教会が苦闘する姿を通して、教会の自立とは何か、伝道とは何か、主の御体なる教会の形成とは何かと、考えさせられる論文である。

## 第七章 「平岩愼保ーメソヂスト教会の指導者ー」

これは、『プロテスタント人物史ー近代日本の文化形成』（キリスト教文化学会編 1990年、ヨルダン社）所蔵の論文である。平岩愼保は、日本メソヂスト教会の第二代監督である。比較的良好に知られている人物であろう。

## 第八章 「白石喜之助の『非戦』の思想」

これは、『山梨英和短期大学紀要』第一一号に収録された論文である。白石喜之助牧師は、1909年4月、日本メソヂスト教会市川教会から甲府教会へ牧師として着任し、1920年にサンフランシスコ日本人教会へ赴任するために甲府教会を辞任するまで、山梨の伝道に力を尽くしている。

## 第九章 「『護教』『教界時報』『日本メソヂスト新聞』『日本基督教新聞』『日本メソヂスト時報』解説」

これらのメソヂスト系新聞は、全て通し番号が振られている。つまり、『護教』から始まって、『教界時報』へと引き継がれ、さらに『日本メソヂスト新聞』へと継承され、という具合になる。これらの資料に関する詳しい解説が、本章に記されている。

これらの論文で取り扱われていることは、これまで十分な研究がなされていない。だから、この論文が日本におけるメソヂストの歴史研究の草分けとなることを願う。

以上のことを十分承知した上で、あえて以下の点を指摘させていただく。所蔵されている論文は、いずれもカナダメソヂストに立った視点で論じられている。それはそれで、必要な観点である。また、澤田先生ご自身がカナダメソヂストの伝統の中に身を置きつつ研究されたのであるから、当然といえば当然である。

だが、例えば三派合同にしても、カナダメソヂストが重要な役割を担ったとは言え、一方の当事者である米国メソヂスト監督教会もまた、大きな役割を担っていた。しかしながらこの論文では、カナダメソヂストに関する論考に比して、米国メソヂスト監督教会の論述が全くもって不十分と言わざるを得ない。米国南メソヂスト教会に対する言及もしかりである。

日本メソヂスト教会の誕生は、あくまでも合同であり、合併・吸収では無かった。つまり、三者を公平に扱うことなくしては、真の論考にはなり得ないのではないだろうか。これらの論の読み方によっては、日本のメソヂスト教会は、カナダミッションを軸として成立したととられるかも知れない。

だがもしそうだとすれば、三派合同の際に、あれほど時間がかかったのはなぜか。その理由は、一読すると分かるように、三派それぞれが「合同」の重要な要素となっていたからではないか。もちろん、それぞれのミッションに温度差があったとしても、だからこそ、「合同」は難航したと言える。カナダメソヂストだけを合同の中心として見る視点は、偏りすぎていると感じる。

この本に収録されている各論文の性格上、どうしてもカナダメソヂストを中心とした記述になることはやむを得ないだろう。それならそれで、そのこ

## 書評

とについての記述があつてしかるべきでは無かつたらうか。

そのような意味でも、この論文集はあくまでも日本メソヂスト教会史研究の嚆矢である。この論文集をもって、日本メソヂスト教会の歴史に関する研究が完成したわけではない。日本メソヂスト教会に関する研究は、やっと緒に就いた、というところだろうか。

今後、この論文集に刺激されて、日本におけるメソヂスト教会史の研究が進められることを願ってやまない。

最後に。本書 **314** ページ **1** 行目、「甲府教会説教 題不明、**1988** 年 **7** 月 **31** 日」とあるが、当時の甲府教会週報によれば、説教題は「この罪を彼らに負わせないでください」となっている。聖書箇所は、使徒行伝 **7** 章 **54** から **60**（当時甲府教会では口語訳聖書を用いていた）であることを、付け加えておく。

（日本キリスト教団甲府教会牧師）